検定農家への情報提供

（増刊）牛群検定通信 No.１１９

令和２年１２月

家畜改良事業団
T03-5621-8921

牛群検定の利活用などについて、解説記事を掲載しています。

１　全酪新報　１２月１日号　全国酪農協会
牛群検定ワンポイントレッスンその９０　冬季前に分娩管理を要改善
冬の分娩事故に要注意

２　ＬＩＡＪニュース１１月号　（一社）家畜改良事業団
新しい牛群検定成績表について（その６９）いろいろな乳量②
305日乳量などの計算方法や活用を解説しています。

検定成績表見方　検索

いよいよ冬至そして大寒です。子牛の事故に注意してください。

本紙がお手許に届く頃は冬至を過ぎて、大寒を迎えるころかと思います。冬本番でますます寒さがつのります。

子牛が寒冷に弱いことは、すでにご承知のことと思います。特に分娩後1週間程度までの子牛は初乳給与と保温が大切です。この分娩1週間までの子牛の事故件数は検定成績表（裏面）で確認出来ます。右図の矢印の「推定新生子牛早期死亡」が、子牛の事故件数です。この例では、年間で127頭の出生があり、そのうち5頭が分娩後1週間で死亡したことを示しています。5％程度が平均ですが、冬季に多くなる傾向があります。5％をこえる農家において、これからの季節は特段に子牛管理に注意しなければなりません。

年間子牛生産状況　※成績表裏面

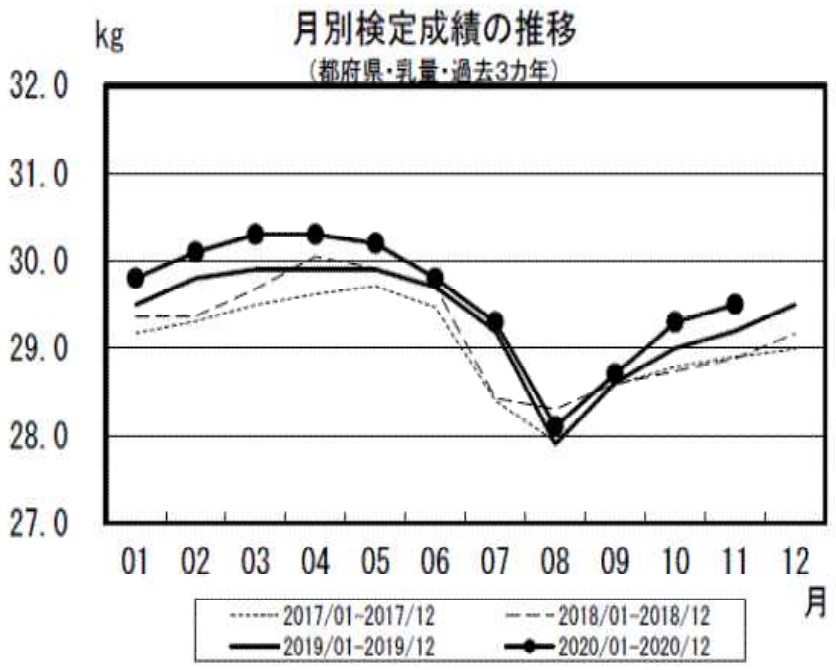
母牛	分娩数	推定出生数 ※4	推定新生子牛早期死亡 ※5	
	頭	頭	頭	%
1産	37	35	3	8.57
2産	34	35	0	0.00
3産以上	60	57	2	3.51
計	131	127	5	3.94

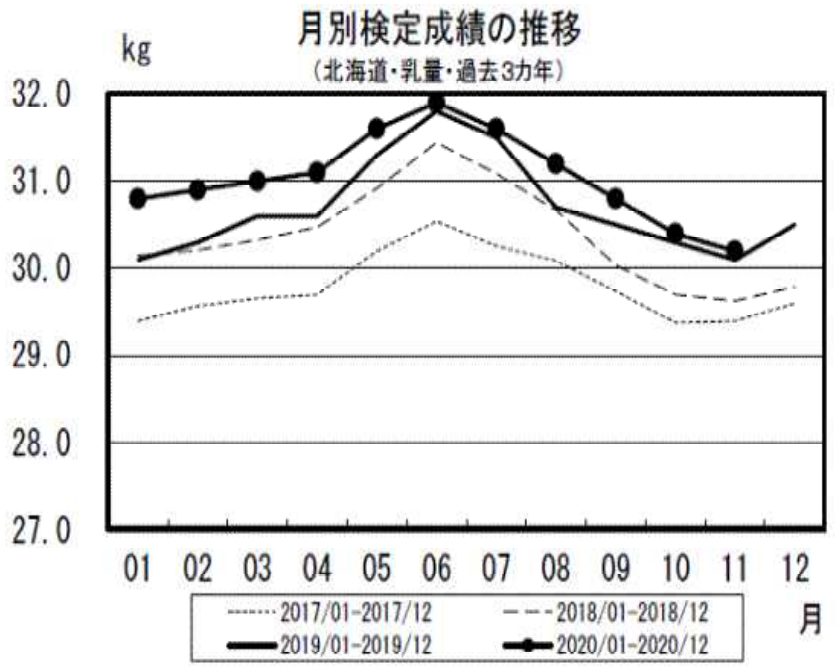
本例では、全体では3．94％の子牛死亡なので平均以下となります。しかし、初産牛から出生した子牛は**３頭死亡８．５７％**と高い数値です。初産の母牛の場合は、初乳が十分でなく、免疫力が劣ると言われています。2産以上の牛が分娩した場合に、初乳を冷凍やヨーグルトで保存しておき、初産分娩の際に利用するようなことも試すと良いでしょう。ただし、2産以上であっても、前産で体細胞数が高い場合は保存初乳に不向きです。

注）推定新生子牛早期死亡は、個体識別（耳標）の情報からの推定値です。

１頭あたりの乳量が良好に推移してます！

令和2年の月別検定成績が都府県、北海道ともに良好な推移を示しています。12月も同様であれば、過去最高乳量となる可能性もあります。





牛群検定！点検シート（その３３　冬季の検定成績表）

お手許の検定成績を使いながら牛群管理の点検を行います。極簡単なものなので、これを機会に検定員といっしょに確認を行いましょう！今回は、冬季に注意しなければならない事項のチェックです。

農家コード　　氏名

１）前ページ（表面）の年間子牛生産状況の「推定子牛早期死亡」が５％をこえていませんか？

Ｙｅｓ　　Ｎｏ

→Yes　冬季の子牛管理に細心の注意を（前ページ参照）

２）図１は、検定成績表の２枚目です。乳量の欄に矢印①のように▽▼マークがタテに沢山並んでいませんか？

Ｙｅｓ　　Ｎｏ

→Yes　前ページ（表面）にグラフを示しましたが、冬から春にかけては、乳量がもっとも伸びる時期です。この時期に一斉乳量減少は最も避けなければならない大きなトラブルです。

３）図２は、検定成績表の１枚目中央です。体細胞数情報において矢印②のように冬季の体細胞数が高くありませんか？

Ｙｅｓ　　Ｎｏ

→Yes　一般に冬季の体細胞数は低くなります。もし、逆に高くなるようでしたら、何らかのトラブルです。

図１

牛コード	乳量(kg) 今月 1回	2回	合計	標準乳量	前月	前々月
0121	9.0	12.0	21.0	24.4	23.0	23.2
0017	17.2	10.4	▼27.6		34.6	37.8
0063	12.4	8.4	▽20.8	3	24.2	▽25.6
0120	6.0	8.0	▼14.0	5.8	26.6	24.0
0106	11.0	13.6	24.6	27.9	▽24.0	28.0
0003	14.0	15.0	▽29.0	32.9	35.0	▽37.4
0119	15.0	9.6	▼24.6	30.3	30.8	31.4
0118	14.0	10.0	▼24.0	29.6	31.0	30.0
0093	10.0	18.0	28.0	35.2	22.6	23.0
0074	8.0	8.0	▼16.0	22.7	▽20.0	22.4
0031	14.6	13.4	▼28.0	36.7	36.0	39.2
0098	13.0	12.8	25.8	36.2	26.8	29.0

①

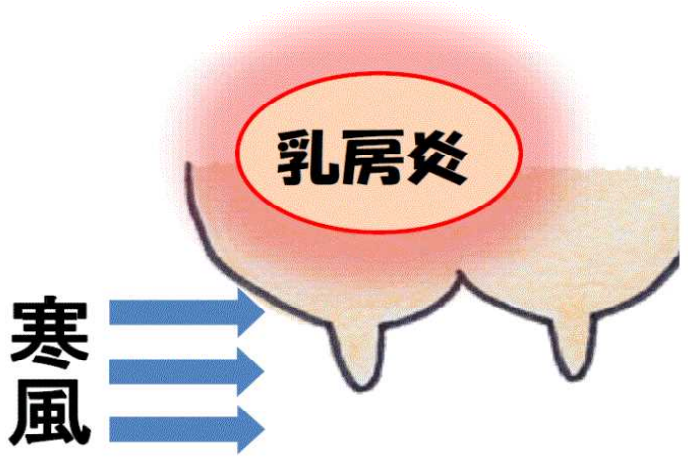
全頭一斉に乳量が下がった場合は、先ずは搾乳機器を点検して下さい。冬は機械に不具合が発生しやすく、真空圧の確認が必要です。飲水も確認しましょう。水道管の凍結も要注意です。

飼料も水分が多いとシャーベット状になり、冷たい水と重なり下痢や栄養不足の原因となります。また、図２のような冬季の乳房炎が蔓延しても一斉に乳量を落とす原因となります。

冬季は乾燥しやすいことから寒さに強い乳牛でも、感冒（風邪）が牛舎内で流行することがあります。この場合は、子牛に感染すると肺炎を起こします。早めに獣医師に相談してください。

図２

移動13ヵ月成績 検定年月日	体細胞情報 体細胞数平均	搾乳牛頭数比率 70以下 %	71～282 %	283以上 %	千/ml 新規 %	千/ml 頭数 頭	乳量損失率 %	損失乳代(月当り) 千円
24.10.26	146 (3.0)	36	51	13	6	5	2	157
24.11.22	181 (3.2)	32	47	21	12	11	2	166
24.12.21	165 (3.1)	35	50	15	9	8	2	154
25.01.24	301 (3.4)	29	47	24	11	9	2	161
25.02.22	426 (3.9)	25	41	34	8	12	2	274
25.03.26	423 (3.4)	25	49	36	5	9	2	216
25.04.24	189 (3.1)	31	53	16	6	6	2	154
25.05.28	176 (3.1)	38	46	16	7	7	2	145
25.06.18	149 (3.0)	40	42	18	7	6	2	122
25.07.24	229 (3.3)	34	43	24	11	9	2	143
25.08.26	217 (3.2)	31	53	16	4	3	2	161
25.09.24	238 (3.2)	36	45	19	8	7	2	172
25.10.23	238 (3.1)	38	46	15	6	6	2	195
平均・計	203 (3.2)	33	49	18	8	7	2	1894
前年成績	211 (3.1)	37	47	16	6	5	2	1677

②

乳頭が、ヒビやアカギレで荒れていませんか？搾乳時に乳頭をチェックして下さい。乾燥した冷たい寒風が、乳頭に直に当たらないようにしましょう。やや高価ですが保湿剤入りディッピング剤も販売されています。